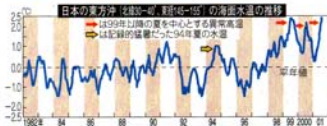
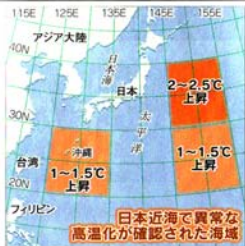


日本近海で異常高温



だ」と話している。

安成教授は「日本のすぐ南の海が亜熱帯から熱帯になったと言える。沖縄付近は完全に熱帯の水温だ。台風が発達しやすく、勢力が衰えずに日本に接近するので要注意だ」と話している。

要因としては、南米ペルー沖が異常昇温するエルニーニョ現象の反対で同海域が低温化するクラ

イル現象」が九八年現象。二六度程度の水温から三年続き、それに伴って西太平洋が逆に高温化することや、太平洋高気圧の南へりを吹く偏東風とアジアモンスーン(季節風)との相互作用が考えられるという。

植田研究官は「全地球を見ても、こんなに海が多大な影響があるのではないかと話す。一方、安成哲三・筑波大教授らのグループも、衛星データから日本南方沖(北緯二〇・三〇度、東経一一五・一三五度と一四五・一五五度)の水温を解析。九八ごろを境に以前より一・五度高い水準で推移していることをつかんだ。

平年より2度急上昇 台風勢力などに影響か

日本近海の太平洋で一昨年から起きている異常な高温化現象を、国内の二つの研究グループが発見した。詳しい原因は調査中だが、周辺の気候や生態系に大きな影響を与えそうだ。二つのうち植田宏昭・気象研究所研究官と川村隆一・富山大助教授のグループは、十日から岐阜市で開かれる日本気象学会で発表する。

植田研究官らが衛星データから日本東方沖(北緯三〇・四〇度、東経一四五・一五五度)の海面水温を解析した結果、一九九九年から急に夏場を中心に平年より二・二五度も高くなっていた。従来はほぼ平年値の前後で推移し、記録的猛暑の九四年夏でも平年より一度高い程度だった。

植田研究官は「全地球を見ても、こんなに海が多大な影響があるのではないかと話す。一方、安成哲三・筑波大教授らのグループも、衛星データから日本南方沖(北緯二〇・三〇度、東経一一五・一三五度と一四五・一五五度)の水温を解析。九八ごろを境に以前より一・五度高い水準で推移していることをつかんだ。